
主人公は苦労人

マサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公は苦労人

【NZコード】

N6360A

【作者名】

マサキ

【あらすじ】

不思議な力を持つ人達に囮まれて一人苦労している少年の話。笑い？ありラブ？ありシリアルス？ありのどたばた現代ファンタジーです。

プロローグ（前書き）

どーも、初めて書かせていただきます。素人なのでいろいろ間違つてると思いますが、どうか勘弁してやって下さい。

プロローグ

この世界には『力』を持つ人々がいる。

彼らはこの世界に同じように存在する魔の物を倒す為にその『力』を使っていた。

しかし、『力』を持つ人々は、時がたつにつれ段々その数が減つていった。

そして、時は現代。人々は平和な日々を暮らしていた。

しかし、その影には、『能力者』と呼ばれる人達がいた。

これは、そんな人達に巻き込まれてしまつた少年の物語。

第一話新しい街で

「ここは、とある街の駅前。そこに、一人の少年少女がいた。

「へー、けつこう都會なんだ」

少年はそう言って辺りを見渡した。少年の名前は『神崎 真哉』（かんざき まさや）彼は今日この街に引っ越してきたばかりだった。

「それはしかたないよ、私達が居た所が田舎すぎただよ」
そう言つているのはもう一人の少女

「神崎 光」

（かんざき ひかり）だった、彼らは一応兄妹だった、一応と言つのは彼らが血の繋がらない義の兄妹だからである。

「まあ、たしかに田舎だったな、あそこは」

彼らが前に住んでいた所は、ほとんど村と言つてもいいくらいの人口が少なかつた。

「けど、あそこも良いところだったよね」

と、周りを珍しそうに見渡しながら光が言つ。

「ほら、そろそろ行くよ」

「あつ、待つてよ~」

そう言いながら、一人は歩きだした。

僕達が向かったのは、これから住む予定のアパートだった。駅の近くにあって、学校にも徒歩で通える距離にある、なかなか好条件のアパートだった。まあ、その分少し古い建物だと言つことは気にしないでおこう。

「あつ、あれじゃないかな?」

そう言つて指をさす光の視線の先を見ると、木造のアパートが見えた。

「うん、多分あれだね」

「じゃあ、あそこまで競争」

「えつ、ちょ、ちょっと待つてよ」

僕はいきなり走りだした光を慌てておいかけた。

「ハア、ハア、ニ、兄さん、早いよ」

息をきらしながら、上目使いに僕を見上げる光。くう、か、可愛い
つ、少し長めの髪に整った顔、美人とゆーより美少女なカンジだ、
それもかなりの。

「光が遅いのが悪いんだよ」

なんとか平常心をたもってそう言い切った僕は、慌てて階段をのぼ
り、僕達の部屋である203号室に急いだ。

「あっ、兄さん待つてよ~」

光も僕の後をおいかけてくる。

これから的生活僕はどうなることやら。

第一回 こひの日常（前書き）

びっくりしました。こんなもんでも見てくれる人がいるなんて。多分更新遅れると思つけど、これからもがんばりたいです。

第一話 いつもの日常

まだ夏と言つには早いこの時期の朝は、まだ少し肌寒い、だが毎ごろになると、うつてかわってかなり暑い、温暖化とは怖いものだ。現在僕は、布団の中で夢の中だ。朝に弱い僕が自力で起きることはほとんど不可能で、誰かさんが起こしにくるまで、いつまでも寝てしまう。そして、間抜けな顔で寝ている僕は、その誰かさんが自分の部屋に入つて来ても、まったく気付かない。

「兄さん、朝ですよ」

その侵入者、光が僕を揺すりながら呼びかける。だがその程度で起きる僕ではない、そのことは相手も承知済みなので

「もつつ、しようがないな」

とか言いながら数歩後ろに下がり

「兄さん、起きろー！」

そう言つておもいつきり僕の上にダイブ！

「ぐうぐう

と間抜けな声を出しながら、僕はいきなり襲つた激痛で目を覚ます。

「ま、また、いきなりなにすんだっ」

僕は苦しみながら、上に乗つてる光に言つ

「だつて、いつも兄さん起きないから」

「だからつて、いきなり飛び乗るなよ」

少しはこっちの身にもなつてほしい。

「ハア、もういいよ、とりあえず降りて」

と光に言つ、いつも思つがこの体制は非常によくない

「あ…」「めんつ」

と、光はいつもどおり顔を赤くして飛び退く。僕は少し意地悪してやりたくなつて

「顔赤くするくらこなら、しなきやいいのこ」と言つてみる。

「う、うるさいなつ、早く朝食作つてよねっ」

光は少し焦つたようにそういいながら部屋を出ていった。

学生服に着替えた僕は、顔を洗つて、簡単に朝食を作つた。僕達の朝は少し変わつていて、朝に弱い僕が光に起こしてもらつて、料理のできない光に変わつて僕が料理をするという感じだ。これで、光が料理上手なら完璧なのだが、試しに作らしてみたが、見た目はかなり美味しいしそうだが、一口食べて僕は強制昇天しかけた。そういうこともあって今では、光が朝起こす係、僕が料理する係に自然になつてしまつていた。

そんなことを思い出していると

「『馳走さま』」

と光が言つて自分の食器を片付け始めた。まったく自分の朝食に手をつけていなかつた僕は、急いで食べ始めた。朝食を食べ終わつて片付けをしていると。

「今日から新しい学校にいくのかあ」と光が言つ。

「そうだね」と相槌をうつ

「緊張してる?」

そう聞かれて改めて考えてみる。

「うん、かなり」と答える。

「ふふふ、大丈夫だつて

と光は笑いながら言つが、今になつて緊張してきた。

「よし、じゃあ行こう

と片付けが終わつた僕はそう言つた。

「うん、早く行かないと遅刻しちゃうよ

そつ言いながら光は時計を見る。【AM 8：00】そろそろ出発しなければ遅刻してしまう。

「じゃあ、行ってきます

「行つてきまゝす

そつ言つて僕達はアパートを出た。

今日から新しい学校生活が始まる。

第三話偶然の出会い（前書き）

新キャラ登場です。けじまだ名前が出てない…

第三話偶然の出会い

学校へは、僕達の住んでるアパートから徒歩15分くらいの距離で、結構近い所にある。本当は寮もあるけど、光の母（一応僕の母でもあるのだが、僕はその人を母と思いたくない）が、

「光は人の多いところ苦手だから、アパートでも借りなさい」

と、言つていた。光はそれで納得していたけど、僕は納得しなかつた。だってそんなことを言つたら、寮なんかより人の多い学校はどうなんだ、と思うのが普通である。しかしあの人はそんな僕の考えを、僕にだけ聞こえるくらいの声で言つた一言で簡単に打ち碎いた。

「だつてそのほうが、あんた困るじゃない」

これを聞いた時、ああ、やっぱりこの人はなんて人だろうと思った。たしかに僕はかなり困る。だって光は家事がほとんどできないから、ほとんど僕がしなければならないし、何より、若い男女が二人つきりと言うことが僕を悩ませる。ああ、義理とはいえ妹相手に少しでもこんなこと考える僕は最低だろうか？

そんなことを一人考えながら歩いていると光が急に立ち止まつた。

「あれ、どうかした？」

「兄さんあれ…」

と言いながら指をさす先をみれば、狭くて薄暗い路地、まあ属に言う裏路地みたいな感じのところに、女人人が一人と男が二人いた。これは明らかにナンパってやつだな、しかもたちのわるい。

「ねえ、助けなくていいの？」

と聞かれて僕はうーんと唸りながら、まず男達の方を見る。少し高めの身長にチャラチャラした格好は、どこにでもいそうなチンピラつて感じだ。

次に女人の方を見る、かなりの美人だ、顔は目が少しつり目がちだけど、すごく整っていて美しい黒髪は腰あたりまである。光が美

少女なら彼女は美女つて感じだ。その美女は無表情で相手を見ている。そこからは、普通なら感じさせるはずの脅えとか恐怖がまったく感じられなかつた。そんなことを考えていると、いきなり美女が動いて、

「あつ…」

と、僕が言つた頃には男一人が地にひれ伏していた。

「なんか、助けとか必要なかつたみたいだね」

「う、うん、そうだね…」

ザコ一人を片付けた美女は、だんだんこちらに向かつて歩き出していた。そんな急なことに僕達があたふたしている間に、美女は僕達の前に立つていた。

「おい。」

「は、はいっ！？」

その美女の凛とした声に呼ばれて、僕は思わず返事をしていた。

「今、見てたのか？」

「えつ！？あ、はい」

「そつか…」

そう言つて美女は少しの間黙つてしまつた。そして急に口を開いて、「お前達見ない顔だが、その制服を着ていると言つことは、転校生か？」

と聞かれて、どうしてそれだけで転校生とわかつたのかはわからないけど、とりあえず

「あ、はい、そうです」

と答えておくことにした。

「そつか…」

と言つてまた黙つてしまつた美女はまた急に口を開けて

「なら、一緒に行つてやろう」

と言つた。なんで今あつたばかりの僕達にそんなことを言つのか、と僕が思つていると

「あの学校は無駄に広いからな、初めて入るやつのほとんどが迷つ

てしまうんだ」

と、言つてきた。へえ～そんなんだ。え、あれ？

「なんで、僕の考えることがわかつたんですか？」

「僕は一言もしゃべつてないと思つたんだけど…。

「ふふ、それはお前が分かりやすいだけさ」

と言つて美女は微笑んだ。その笑みで僕は思わずドキッとしてしまつた。

「よ、よかつたね光この人が案内してくれるって」

と今まで黙つていた光に言う。すると光は冷めた目で僕を見ながら

「ふーん、よかつたね、兄さん」

と少し怒つたように言つてくる。

「あれ、どうかした？」

「別につ、どうもしてないもんつ！」

とここんどはすねたように言いながら一人歩き出した。僕と美女は顔

を見合させて慌ててその後を追つた。

第四話初登校（前書き）

やつぱり更新遅れ気味です。

第四話初登校

僕達一人は、その美女こと龍崎零さんと一緒に学校の校門の前にいる。（名前は来る途中に教えあつた）

「おつきいね~」

光のその言葉に、僕は改めて学校全体を見る。校門はいたつて普通だが、校庭がかなり広い。

零さん（なぜか名前で呼べと言われた）の話では、この校庭は縁も豊かで、噴水やベンチなどもあって生徒にも人気だそうだ。そして校舎は、一目見ると、まるで砦のような形をしていて、生徒達が普段生活している校舎が四角形のようにあって、その真ん中に部室棟と一部の生徒が暮らす寮があるらしい。どうしてこの様な配置になつてゐるのか零さんに聞いてみたが、含みのある笑みを浮かべるだけで、結局答えてくれなかつた。

「ほり、行くぞ」

そう零さんに促されて僕達は校舎の方に歩いて行つた。

校舎の中はとても綺麗で、本当に100年以上の歴史がある（パンフレットに書いてあつた）のかと疑問に思つたが今は気にせず零さんの後に付いて行つた。

「ほら、ここが職員室だ」

零さんが言うようにスライド式のドアの上には、【職員室】と書かれたプレートがあつた。職員室があつた場所は、南棟と呼ばれる場所（南にあるからそう呼ばれてる）の一階にあつた。

「じゃあ、私は教室に行くからな

「あ、はい、ありがとうございました」

零さんはわずかに微笑んで、自分の教室に向かつて行つた。

「それにしても、零さんって親切な人だつたね

「うん、そうだね。それに綺麗だつたし

光の言葉に僕は思わずそう言つていた。すると、機嫌が良くなつて
いた光はすねたように頬を膨らませて

「どーせ私は、零さんみたいに美人じゃないですよっ」

と、言つて一人職員室に入つて行つた。何を怒つているのだろうと
不思議に思いながら、後を追つて職員室に入った。

失礼します、と言つて職員室に入ると、一人の教師がこちらに気付
いて

「おーい、こっちだ」

と、言いながら手招きしている。僕達はその先生の前に行つた。

「転校してきた神崎です」

「おう、話は聞いてるぞ。俺がお前らの担任の熊谷だ、よろしくな
！」

熊谷先生はガハハと豪快に笑いながら、僕の背中を叩いてきた。ち
なみに光と僕の歳は同じだ。僕の方が誕生日が早いから光が勝手に
兄さんと呼んでるだけで、変な趣味があるわけではない。

「よ、よろしくお願ひします」

熊谷先生に叩かれた背中をさすりながら挨拶をした。

「さてと、これから教室に行くわけだが……わかってるな？」

さつきまで笑つていた先生は急に真面目な顔になる。まあ、言いた
い事は分かるけど。

ここ【私立月光学園】には表と裏の顔がある。表は他の学校よりレ
ベルが高いが、どこにでもありそうな普通の学校と言つ顔。そして、
裏の顔。それはこの学校が、能力者の学校であると言つ事。能力者
とは、簡単に言うと不思議な【力】が使える人間の事だ。今の時代
でも、数は減つたけどそう言つ学校は全世界にあるらしい。
先に言つておくけど、僕は能力者ではない。光が能力者なのだ。ま
あ、光がどうやって能力者になったかは、今は思い出さないでおこ
う。そう言つことから、僕はこの学校唯一の普通の人間だと言うこ
とになる。そうなると一人になってしまわないかと言う事を先生は

心配しているのだろう。そう言つのは結構なれてるけど。

「はい、大丈夫です」

「そうか。まあ、あいつなら大丈夫だろうから、安心しな。」

そう言つて先生はまた笑つた。

「よし。それじゃ行くぞ」

先生はそう言つて、教室に向かつた。その後を追いかけていると、光が

「ねえ、本当に大丈夫？ やつぱり私だけの方がいいんじゃない？」
と言つてきた。そんな事言つて、本当は自分が一番一人になりたくないくせに。

「大丈夫だつて。それより光こそ大丈夫か？」

とりあえず僕は違う話題を振る。

「へつ、どーして？」

「いや、仮にも私立なんだから、それなりに人もいるんじやないかなて思つて。」

「あ…………ど、どどどうしよう、緊張してきちゃつたよう」

今頃になつてそんな事を言う光に苦笑しながら、がんばれと言つて
やる事しかできなかつた。

第五話偶然の再会！？

僕達は、これから僕達の教室になる2年2組の前にいる。2年生は全部で5クラスあって、生徒の【力】の強さで配属されるクラス決まるそうだ。光の【力】の強さは、結構高い方なので2組、別名Aクラスに入ることになった。ちなみに1組がSクラスで、3組がBクラス、4組がCで5組がDクラスだそうだ。

「それじゃあ、呼んだら入つて来いよ」

そう言つて先生は教室に入つて行つた。

「よーし、お前らよく聞け。今日からウチの生徒になる奴らを紹介する

その声の後に、教室が騒がしくなる。

「おら、静かにしやがれ。それじゃあ入つて来い」

先生に呼ばれて、僕は教室に入った。

教室に入つた僕は先生の隣に並んで

「転校してきた神崎真哉です。よろしくお願ひします」と普通の挨拶をする。

光程ではないけど、僕も人前で話すのは得意じゃないからそんな普通の挨拶しかできなかつた。それでもみんなは、よろしくーとか言いながら拍手してくれた。まあ、外見が良いわけではないから、これくらいの反応が普通だろう。さて、次は光の番だ。と思って隣を見ると光の姿がなかつた。ドアの方を見ると、固まつてしまつている光がいた。僕は溜め息をついて光の方に歩いて行く。

「ほら、早くしないと。」

「だつて、まだ緊張して……」

まだそんな事を言つている光の背中を無理矢理押して、教室に入つて行く。

「ちょ、ちょっと兄さんっ、まだ心の準備が……」

出来てない。と言い切る前に光をみんなの前に立たせる。

「あつ、えと、か、神崎光です、よ、よろしくお願ひします」
少しうつ向いて、上目使いにみんなを見る光。その可愛らしさに男
どもが、スゲー！とか、可愛い過ぎ！とか、萌え～とか言ってた、
最後の方は僕には理解デキナカツタヨ？女子はと言つと、可愛い！
と言う人もいれば、ふ～ん。ま、本性はどうだか知らないけどね。
とか言つてる人もいた。まあ光はこれが素なんだけね。

「おら、静かにしろ。今日の一時間目は転校生への質問タイムだ。
まあうるさくない程度にしとけよ。」

「「は～い」」

そう言つて先生は出て行つた。

そしてさつそく質問タイムスタート。その標的はもちろん僕ではなく光で、光の席には人だかりができていた。その隣に座る僕もたまに質問されるが、ほとんど光の事についてだった。

いまだに質問去れ続けている光を見て、思わず溜め息がでた。

「大変そうだな、妹は」

「そうだね…」

聞き覚えのある声に自然と返事を返した。あれつ？この声は……あ
つ！僕はそれが誰だかわかつて急いで振り向いた。

「零さんっ！？」

「また会つたな真哉」

そこには今朝出会つた零さんがいた。

「零さん2年生だつたんですねか」

「ああ、以外だつたか？」

「ええ、3年生だと思つてました」

実際零さんの外見はかなり大人びて見える。

「よく言われるよ」

そう笑いながら返してきた零さんに、僕も笑い返す。そこで僕は背

後から視線を感じて振り向いた。

そこには黒いオーラを放つ男どもと + がいた。その + とは光の事だ。男達はその嫉妬やら殺氣やらがまざったオーラを放ちながら。どーして転校生が竜崎さんとあんなになかがよさそうなんだっ！？竜崎さんがあんな楽しそうにつ！？とか言っている。まあ零さん美人だから人気があるんだろうなとか呑気に思つていると、

「兄さん……楽しそうですねえ」

その光の声はとても不機嫌そうだった。

「あのー、光さん？どーしてそんなに機嫌が悪いのですか？」

「……もう知らないっ！」

そのままは光は黙つてしまつた。

他の生徒が溜め息をつく中、僕と零さんにはどーして光が怒つてるのか本氣でわかつてなかつた。

第五話偶然の再会ー?（後書き）

テストが近いからしばらく更新できなさそうです

第六話KDC襲来！？

いきなりですが現在僕は追われています。ドーしてこんなことになつたのか…、とりあえず僕は、今日起こつた出来事を思い返す。

一時間田には色々あつたけど、その後の授業は特に何事もなかつた。

クラスのみんなに僕は普通の人間だと言つた時は、最初はみんな戸惑つていたけど、そんな事関係無いと言われた時は、結構感激した。

そんなこんなで迎えた放課後。零さんは部活があるらしく、すぐに教室を出でしまつた。それと入れ違いように教室に入つてきた団体に、僕はずつこけそうになつた。

全員頭にハチマキを巻いたその集団は

「たのもーーー！」

と道場破りの様な事を言つてきた。

彼等の頭に巻いてあるハチマキをよく見ると、

『KDCばんざい！』『竜崎さん最高！』『風火ちゃん萌え！』

などと、まったくもつて意味不明な事が書いてあつた。

うつわー、なんかかなり痛い人達出てきたよ。とか思つていると、

「我々は、このクラスに転校生が来たとの情報を得た。さあ、ど二にいる。

と言つて教室内を見渡す。

「会長！あの娘ではありますか？」

そう言つて会員A（会長つて言つてたからなんかの会なんだらう）が指差した先は…。

（光つ！？）

彼等は何故か光を指差していた。会長が

「むう…」

と唸つた後、

「我等の予想を遙かに上回るスペックだ！」

と、これまたわけの分からん事を言つ。

そして彼等は一斉に光に向かつて歩き出した。

とうの光は、怯えた表情でただ立ち尽くしていた。あー、これはあまりよろしくない、そう思つた僕は、さつと光の前に立ち塞がる。

「何だね、君は。」

と会長に尋ねられる。

「貴方達こそだれですか？」

そう聞き返した僕を会長は鼻で笑つてから

「我等の事を知らぬとは、とんだ愚か者もいたもんだ」と哀れみを含んだ声で言つてきた。そして会長はふんぞりかえつて

「我等こそ！月光学園K（カワイイ娘）D（大好き）C（^{クラブ}だ！！）と、声を張り上げて言い切つた。なんだよその、○ケ○ン大好きクラブみたいな会はー僕は思わず突っ込みそうになつて慌てて自制する。こんなわけの分からぬ人達に関わるもんじゃない。そう思い

「ああ、そうですか。それじゃ僕達はこれで」

そう言い残して帰ろうとすると、「ちょっと待つたー！まだ帰るわけにわいがん」

いきなり腕を引っ張られて少しこけそつになつた。

「なんなんですか？いきなり」

そう聞くと、

「君に用はない」

と、会長は言つてから光に向き直る。

「喜びたまえ。君は我等KDCが崇める女神の一人に認定しよう
ああ、また変なこと言つてるよ…。どこまでも痛い彼等に僕は呆れてしまつた。てかそろそろヤバイと思つ。なにがつて？そりやもちろん光の事さ。

「うつ、うつ、うわあ～ん！。ま～ぐ～ん！」

光はいきなりなきながら僕に抱きついてきた。ああホラ泣いちゃつたよ。僕は光の頭を撫でながら、

「もう大丈夫だから。ねつ？ほら、泣きやんでよ」

昔から光は泣いた時こうやると泣きやんでた。ついでに言つと光は、昔は僕の事を、まーくんと呼んでいた。

しばらくして段々光は泣きやんできた。無理も無いが、人見知りの激しい光がいきなりあんな事言われたら泣いてしまうよな…。

「もう大丈夫？」

「うん、ありがとう兄さん」

そう言つて光は微笑んだ。その微笑みを見て、やっぱり光は笑つてる方がいいな、なんて思つていると…

（あれつ…）

さつきまで騒がしかつた教室内が一気に静まりかえつていた。そして、その静寂はすぐに破られる。

「ウガアー！貴様今何やつた！？」

「兄妹で…あんな…」

「お前は変態かつ！？実の妹にあんな事！」

いきなり煩くなつた教室に僕は思わず耳を押された。

「あー！煩い！僕は変態じやない！てか僕達は実の兄妹じゃない！」

気が付いたときには、そう言つてしまつてた。

「な、何だと…、では光ちゃんは貴様の義理の妹と言つ事か…？」今まで黙つてた会長はそう呴いた後に、

「ガアーーー！なんておいしいシチュエーションなんだーーー！貴様、生かしては置けんっ！皆のもの、であえ、であえーーー」と叫びながら僕に飛びかかってきた。その後に続いてKDCのメンバーと嫉妬に狂つたクラスメイトが襲いかかる。

「うわあ！な、何つ？僕何もしてないよ！？」

「貴様の存在がこの学園のバランスを崩すのだ！」

「わ、わけわかんないって！？」

そう言つて、僕はとりあえず全力で逃げ出した。

（はあ…、何であんな事になつたんだろ。）僕は走りながらそんな事を考えてた。僕は今、北棟と呼ばれる校舎にいる。なるべく人の居なさそうな所で暫くの間隠れていようと思つた僕は、今の時間帯使う事のない北棟に来たと言つ訳だ。

「ふう…、ここまで来ればもう…」

大丈夫、と言おうとした矢先、前の廊下から何やら声がした。
（やばっ！）

と思つた、僕はとっさにすぐ近くにあつたドアに入った。

その裏庭へのドアに、消えかかった文字で、

【立ち入り厳禁】

そう書いてあつた事も知らずに。

第六話KDC襲来！？（後書き）

次回からやつと少しふァンタジーが入ってきます。　こんな駄文
でよければ評価してやって下さい。狂喜乱舞して喜びます

第七話化け物出現！？

とつさに入った扉の向こうに、何もない広い空間があった。まつたく整備されてないその空間は、ただ荒れた地面とそれを囲むようにある木々だけだった。まるで深い森の中の開けた空間のようなその場所を始めて見た時、僕は違う世界にでもきたのではないかと思ってしまった。しかし、僕の後ろにはちゃんと校舎もあるしさつき入って来た扉もある。

不思議に思いながらも、好奇心でこの場所を歩き回った。
あたりが暗くなつた頃には、とりあえず目で見える範囲は調べ終わつたけど、結局何もなかつた。携帯電話で時間を見ると【6：13】と表示されていた。

（もうこんな時間が…そろそろ帰らないと）

そう思い、携帯電話から田を離した時、背後から異様な感じがして、僕は慌てて振り向いた。

そこには、化け物がいた。

ライオンのような体に狼のような頭、口から延びている鋭い牙は全ての物を噛み碎いてしまいました。その化け物は低い声で唸

りながら少しづつ僕の方に近づいてくる。

(マジかよ…)

そう思いながら、僕はジリジリと後退りする。少しでも隙を見せれば、こちらが殺られる、その事を昔の経験から学んでいた。そう、僕はこいつのような化け物に襲われたのは今回が初めてではない。まあ今は、昔の事を呑気に思い返している余裕なんかまったくないけど。

(どうする……倒したくても僕は能力者じゃないから【力】も使えないし…)

こんな時、能力の使えない自分がとても無力に感じる。

(くそ、どうすればいいんだよ…)

そして、とうとう化け物が僕に向かつて飛びかかってきた。

「うわあっ…！」

僕はとっさに横に跳んで回避する。さっきまで僕がいた場所に化け物は着地して、またこちらに向かつて跳んで来た。

「くつ、やるしかないのか…！」

僕は覚悟を決めて、跳んで来た化け物の顔にタイミングよく回し蹴りをする。

僕の蹴りは化け物の顔におもいっきり当たって、化け物を数メートル吹っ飛ばした。

これでも、武術には多少の心得がある。初めて化け物に襲われた時何もできなかつた僕は、その後に光の母に弟子入りして、強くなろうと修行に励んでいた。そのかいあって、今現在なんとか戦えている。化け物の攻撃を避けては反撃して、距離をとつてまたカウンターで攻撃すると言う戦法で相手を少しづつ弱らせていく。

(このままいけば勝てる！)

そう思つた時だった。

「グウオオオーーー！」

と、化け物はいきなり天に向かつて吠えた。すると空中から突然

無数の火球が現れて、僕に向かつて飛んで来た。

「うおっ、わあっ！」

次々に飛んでくる火球をなんとか回避するが最後の火球を避けた時に、タイミングを合わせて化け物が跳んで来た。

（やられるつ！？）

僕は死を覚悟して目を閉じた。しかしつまでたつても何も起こらない。

僕は恐る恐る目を開ける。

そして初めて目に[写]ったのは、頭を斬り飛ばされた化け物と、一振の大太刀を持った零さんだった。

第八話 BG部ってなんですか？（前書き）

はつきり言つてダメダメです。テストの息抜きに書いてみたけど、自分で読んでこりやダメだと思いました。けど、一生懸命書いたのでどうか見てやってください

第八話 BG部ってなんですか？

頭を大太刀で斬られた化け物は段々と光の粒子となつて、最後には跡形もなく消え去つてしまつた。

「大丈夫か？」

今まで呆然としていた僕は、零さんの声で我に帰つた。

「へつ！？あつ！？はい、大丈夫です」

「そうか。だが、どうしてこんな所に真哉がいるんだ？ここは立ち入り禁止だつたはずだが…」

何かブツブツ言つた後に零さんは、

「そんな事よりも、お前はなんて無茶をしたんだ、生身で魔族と戦うなんて」

と、責めるように聞いてきた。

「いやあ、まさかあんなのが出でくるとは思わなくて。……いうか魔族ってなんですか？なんで零さんここにいるんですか？」

僕が眞面目にそう聞くと、零さんは呆れたように溜め息を吐いた。

「そう言えばお前は転校生だつたな…まあ、知らなくて当然か…」

「?なんのことですか？」

「いや、いい、気にするな。魔族については授業で習つと済つぞ。それと、私がここにいる理由だが……」

僕はわざわざ太刀なんて持つて、化け物を退治する理由に興味津々だつた。そして、少しの間をおいて零さんは口を開いた。

「部活だ」

なんですかね、それ。

「ふ、部活…ですか？」

「そうだ、部活だ」

僕は混乱している頭で必死に考えた。

(大太刀振り回して化け物退治する部活ってなに…?)

すると、僕が混乱しているのがわかったのか、零さんは悪戯っぽく微笑むと、「なんなら部室に来てみるか?」

と言つてきた。僕はその微笑みにドキッとして、

「え、いいんですか?」

と答える。正直かなり気になる。

「ああ、別にいいぞ。」

付いてこい、と言つて校舎に向かつて行く零さんの後を、僕は多少の不安を抱きながらも付いて行つた。

そして、現在僕は全部で三階ある部室棟の一階にいます。零さんに付いて行きながら周りを見渡すと、一階だけでもかなりの数の部活がある事がわかつた。

しばらく歩いていると、零さんが立ち止まって、

「ここが私が入っている部活だ」

と言つた。僕は扉についている部活名をみてみる。

【BG部】 そうそこに書いてあった。

(BG部ー?ー)、これはまたあんまり聞いた事の無い部活だなあ
…

僕がその名前について大いに悩んでいると、零さんはそんな事結構い無しに部室入つて行つた。僕も慌ててその後に続いた。

部室の中は案外広くて、なんだか会議室みたいな所だった。そしてその中でもっとも僕の目を引いたのは、部屋に置いてあつた棚いっぱいに置いてあるボードゲーム達だった。

(ボードゲームだからBGか)

そんな事を一人納得していると、零さんは部室の奥のひときわ大きい、まるで社長室にあるような机がある所まで進んで行く。その机の前まで来ると

「ただいま戻りました。部長」

と言つた。すると、今まで僕達の反対側を向いていた回転式の椅子がゆつくりとこちら側に振り返つた。

「ああ、ご苦労だつた」

そこにいた人物はそう答えた。部長と呼ばれたその人は、知的なメガネをかけたいかにも優等生っぽい感じの人だつた。そして部長は僕の存在に気付くと、

「おや、君は?」

と聞いてきた。僕は慌てて、

「2年の神崎です」

と答える。いきなり質問されて、ちょっとびっくりしてしまつた。

「彼、新入部員?」

部長は、今度は零さんにそう聞く。

「いいえ、違います。…ですが、魔族との戦闘を見られてしました。」

零さんはそう言つたが、実際は一瞬で零さんが化け物を倒したので僕はほとんど何も見てない。

零さんの言葉を聞いて、部長は少し考えてから、

「ふむ、やつですか……なら、彼を我が部へ入部させるのはどうぞ
じょり」

部長の言葉に、零さんも、

「やつですね、それがいいですね」

なんて言つてゐる。

「いや、ちょっと待つてください…どうしていきなりそういうなんですか！」？

僕は反射的にやつ聞いていた。なんで僕がこんな変な部活にはいらなければならぬのか。そんな事を考えていると、部長さんが「君は故意にではないにしろ、我が部の裏の顔を知つてしまつた。これは言わば口止めだよ」と、わざわざ理由も教えてくれた。僕は溜め息をつきながら、最後の悪あがきに

「拒否権を発動します」

と言つてみるが、

「却下だ」

やつぱり、零さんに切り伏せられた。

こうして僕は、転校してやつぱり元に戻ってしまった事になつてしまつた。

第八話 BG部ってなんですか？（後書き）

転校編はこれで終わりです。次からは球技大会編です

第九話続・いつもの日常（前書き）

更新しました。よかつたら読んでください

第九話続・いつもの日常

朝と言つのは一般的に、清々しいとか爽やかみたいなイメージがあるけど、僕の場合はまったく違う。

眠い、とにかく眠い。朝に弱い僕が思つ事はこれだけだ。そして、僕の朝の苦労がもうすぐやつてくる。

それは、そつとドアを開けて、

「兄さん！起きろー！」

おもいっきり、寝ている僕の上へダイブ！

「ぐふおー？」

痛いです。めっちゃ痛いです。毎回これでは身がもちません。

「い、いい加減この起こし方止めてよ光」

僕は、毎回朝から僕の事を半殺しにする妹の光に懇願する。

「だًめ！兄さんは普通の起こし方じや起きないんだもん。そんな事言つてないで早く朝食作つてよ」

そう言つと、部屋から出していく光。理不尽に思いながらも、僕は学生服に着替えて台所に向かつた。

トーストとハムエッグに、インスタントのコーンスープと言つ簡単な朝食を作つて、それらをテーブルに置いてから自分の椅子に座る。光も座つたところで、一緒にいただきますと言つてから食べ始める。

「あ、そうそう兄さん知つてる？もうすぐ球技大会があるんだって」

光がいきなり、思い出したよつと言つ。

「へへ、そなんだ。なんでそんな事知つてるの？」

「友達に教えてもらつたの」

僕は、人見知りの激しい光にたつた一日で友達が出来たのに少し驚いた。まあ、喜ばしいことではあるけど。

その後も、光と少し話しをしながら朝食を食べて、食べ終わった後に片付けをしてから、僕達は一緒に家を出た。

学校に到着すると、昨日覚えたばかりの自分達の教室に向かう。

教室の中に入つて、自分の席に座ると、隣に座っていた男子が、

「よひ、おはよひ

と、挨拶してきた。

「おはよひ。ええつと…」

僕が相手の名前がわからないでいると、それを察したよひに、

「俺、にしだまこと西田誠よろしくな！」

そつ名乗ってきた。「うん、よひじへ

と、僕も笑顔で答えた。

その後も、西田君と色々と喋つていると、チャイムが鳴つて先生がやつてきた。

S H R が終わると先生が教室を出てから、違つ先生が入つて来て、早速一限が始まった。

最初の授業は、昨日僕が遭遇した魔族に関する話しだつた。

魔族について簡単に説明すると、下級、中級、上級に分かれていて、下級の魔族は知能も低いしあまり強くもないらしい。

中級になると魔法が使えるようになるらしい、多分昨日の魔族は中級だったのだろう。

そして上級になると、人の言葉も理解できる程の知能と高い戦闘力があるらしい。

後、更にその上のレベルの魔族を魔王と呼ぶらしい。

魔王についてはあまり多くの事は知られてないが、圧倒的な力を持つてゐるらしい。まあ、仮にも魔王なんて呼ばれてるくらいだからかなり強いのだろう。それと、もう一つ魔族と似たようなもので、神族と言う物も居るらしい。基本的には魔族と同じで下級、中級、上級に分かれしていて、その上に魔王と呼ばれる存在が居るらしい。

授業の話しが簡単に説明すると、こんな感じだ。

最初の授業の後は、数学とかの授業で、普通の高校とあまり変わりなかった。ただ一つ変わった事は、前に居た高校よりも授業内容が難しい事くらいだけど、勉強があまり得意ではない僕的には、かなり大問題だ。

午前の授業が終わって、今は昼休み。食堂に行く人や、現在戦場になつてゐるであろう購買に行く人も居た。

その中で、僕は持つてきた弁当を食べようとしたところでの、

「今から昼食か？」

と、零さんに声を掛けられた。

「はい、そうですよ。零さんもですか？」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、よかつたら一緒に食べませんか？」

「む、いいのか？」

ちょっと控え目に零さんが聞いてくる。

「はい、一人で食べるより一人の方がいいじゃないですか？」

「そうか、ならお言葉に甘えさせてもらおう」

そう言って空いてる椅子に座つて、持つていた袋を机に置く零さん。その袋の中にはコンビニ弁当やおにぎり、飲み物にイチゴ牛乳が入つた。それを見た僕の感想は、

(イチゴ牛乳って…、零さん、可愛い所もあるんだなあ)

と言つ、少し不健全なものだった。

早速食べようと僕達が箸をもつた時、

「兄さん！一緒に食べよう！」

いきなり光が隣から大声を出したので、あやつゝ弁当を落としかけた。

「い、いきなり大声出すなよ光！」

「そんなの知らないもん！」

文句を言つた僕に光はそう言つと、自分の弁当を食べ始めた。

どうして光が怒ったか分からぬ僕と零さんは思わず顔を見合わせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6360a/>

主人公は苦労人

2010年10月28日09時28分発行